

信州昆虫資料館報

No. 9

2012. 1



2012年

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

四方を海に護られ、内陸には山が連なり、豊富で良質な水を湛える列島日本。
黄金の実を食べ、木の実草の根、海草に、魚に虫に動物たちの恩恵を戴きながら
春夏秋冬の暮らしを作り上げてきた宝島日本。この地の唄は尽きぬはずだった。

が、2011. 3. 11は、そんな想いを吹き飛ばしてしまった。

思えばはるか昔から人間の争いは絶えることなく、果てに原子爆弾を落とされ

世代を超えて後遺症に苦しんできた国でもあった。

巨大なプレートが重なる上にかろうじて乗っている島は、地震大国とも呼ばれていた。

はかりしれぬ犠牲者の歴史に、何を学んだのかどうか。

何が起ろうと起るまいと、容赦なく刻まれていく時間。人間の在りようによって

自然の在りようも変化していく。新しく誕生してくる無垢なものたちに

無に帰せない放射性廃棄物を残していく大人の判断。

記憶はどこまで残せるか…。

汚染された地域に人や動物が暮らせるようになるのは、いつの日か。



昨年10月、当館でも一昨年企画展示（どくどくマンボウ昆虫展）させていただいた
北杜夫さんが亡くなられました。巨星は本当の星になっていくようです。



昨年は、被災地に祈りを込めるばかりの1年でもありました。

大気は流れていますし、雨は地中に滲みていきます。若いお母さんたちと赤ちゃんや子
供たちのことを思って辛い日々ですが、昨年の館のスケジュールはすべて終了しました。

4月21日に春のオープン、5月青木小学校で教鞭をとられていた「藤森敬一さん唄のコン
サート」、子供たちも来てくれました。月茅野實さんの講演会「日本列島の自然とエネル
ギーを考えよう」では、原子力発電に頼らず太陽光を頂いて・・・と勉強会をしました。そ
れぞれに胸に秘めたものは大きかったと思います。自然観察会ではみんなで入った6月の
萌える山に、小鹿がうずくまっていました。地球を楽しむ会と共催でした。

7月当館オーナーの講演会「ハチに刺されないために」、毎年一回は先生のハチのお話を
聴きましょう。8月ライトトラップによる夜間昆虫観察、子供から大人から専門家までワ
イワイ賑やで時の経つのも忘れませんでした。9月丸川尚子さん唄のコンサートとマダラヤンマ
の池を訪ねる会、おなじみ丸川さんの唄にうっとりした後は上田市富士山の池に行き、ト

ンボには会えなかったのですが、随分長い間池を楽しみ、風を楽しんできました。

10月は、上高地の自然インストラクター、松田俊雄さんによるお話会。和室での虫談義も良かったですね。11月「ありがとう会コンサート」と懇親会。4名の男性コーラスでロシアの唄をたっぷり聴かせていただきました。今年はオーナー小川原先生の村での地域医療50年にちなんで、同年のお仲間が参加して下さり花束贈呈などのセレモニーもありました。先生のますますのご活躍を祈念しながらの懇親会は、始終和やかでありがたい時間が流れました。毎月一回の催しも、8年目を終えました。ご参加くださった皆さまに心より感謝申しあげます。また、ご参加に際しお菓子など、いつもたくさん頂きます。お一人お一人へのご挨拶やお礼が行き届いていないと思います。改めて御礼申しあげます。

★2012年冬・春のお知らせ★

新年2月 日～ 日に、上田市上田原にある創造館で が開催されます。当館に協力依頼がありましたので、喜んで参加させていただくことにしました。展示ブースには、山田靖さんの作品やフェアブルおじさん井出勝久さんに寄贈していただいた標本も展示します。さらに12日(日)午前10時～12時は、フェアブルおじさんと野原が、冬に見れるチョウの蛹や幼虫などを持参してみんなと遊びます。標本箱から出した虫の観察や、絵や立体で表現してみることもやります。是非遊びに来てくださいね。

春のオープンは、4月21日(土)を予定しています。まだまだ寒い時期ですが、5月連休頃には、しだれ山桜の並木が満開になります。それから少しずつ遅い春の風が吹き始めます。そしてまた、昆虫資料館の春夏秋冬を共に楽しんでいただく格好です。

行事の内容や開催日は、5月頃No.10でお知らせしますが、できれば「信州昆虫資料館」を検索してご確認ください。なお、ホームページの掲示板は、冬でもご利用いただけますので、よろしく願います。

春のオープンと同時に、ヘルマンヘッセ昆虫展、どくとるマンボウ昆虫展、ことわざの虫たち展等々でおなじみの、新部公亮さんによる「文学の中に出てくる虫たち」及、「ギリシャ神話に出てくる虫たち」の展覧会を開催します。5月30日までの予定です。

どうぞお見逃しなく、お楽しみに。

フジマメとウラナミシジミ

日本チョウ類保全協会会員 田島 茂

1. ウラナミシジミ

ウラナミシジミは南北アメリカ以外に広く分布するグローバルな蝶であるが、地理的な変異は知られていない。日本では千葉県南部とかの温暖な地域で越冬し、順次世代を繰り返して北上する。群馬では通常9月に現われ、11月中旬まで飛ぶ姿を見ることが出来る。

雌雄の違いは翅表で顕著に異なり、♂は細く縁取りされた青藍色だが、♀は太く縁取りされ、中心は♂より濃い藍色で、角度によってブルーに輝く。翅裏は黄褐色の波模様で後翅外縁に白帯、肛角に内側橙色の黒い紋を2つ持つ。寒い冬を過し早春に羽化したチョウは翅裏の波模様が乱れ、白帯の幅が広くなり、肛角紋が消失する。・・・これを冬型と呼んでいる。



画像-1 ウラナミシジミ

2. 冬季飼育

秋にクロツバメシジミの写真を撮りに行くと、ウラナミシジミに出逢うことが多い。それはツメレンゲのあの大きな花穂に吸蜜にきているものと勝手に解釈していた。ところがあるとき図鑑を調べていると「ツメレンゲの花穂でも幼虫が見つかる時があり、成虫まで育つ」とある。そのとき既に入手していた40cmにもなるツメレンゲの花穂があったので、近くの河原でヤブツルアズキの花芽に付いていたウラナミシジミの卵を採ってきて、ツメレンゲの花穂にそっと移植した。

その卵は2週間経っても孵化せず失敗に終わった。11月も中旬になり頼みのヤブツルアズキにも霜が降りて枯れ始めたので、花を全て持ち帰り幼虫を探した。小さな幼虫4頭をツメレンゲに移動し、残り2頭はインゲンマメで容器飼育した。このインゲンマメで飼育した場合12月中に蛹化し1月初めに羽化した。ツメレンゲも年が変わって花がなくなってきたので、幼虫を探すと2頭が小さな終令となっていた。最後までツメレンゲで飼育したかったが室内でも枯れ始めていたので、1月中旬インゲンマメ飼育に切り替えた。インゲンに移した2頭は寒さにも耐えて2月下旬に蛹化し、3月下旬から4月はじめに羽化した。4月に羽化した個体は肛角紋の消えた冬型の特徴を備えていた。残念ながら翅表のブルーの濃さや大きさは見ないで、標本を作る方に差し上げてしまったので、



画像-2 4月羽化の冬型

自分の目で翅表を見ていない。

ウラナミシジミの冬季飼育は、越冬地から北へ生息域を拡大して来て、その地で死に絶えてしまうので、飼育が上手く行かなくても罪悪感がないところが良い。同じ時期ヨモギの葉にいるヒメアカタテハも同じだが、冬の代用食がないので途中で死ぬことが多い。

3. 我が家にウラナミシジミを呼ぶ作戦。

群馬ではウラナミシジミは、夏の終わりごろから見られ、荒地にあるヤブツルアズキや栽培のアズキ畑でよく見られる。最近では近くでアズキの栽培が減り、頼りはヤブツルアズキのみ。そこで昨年我が家の庭にヤブツルアズキを植えた。名前の通り我が家の庭は藪と化したウラナミシジミは現われなかった。

そこで学生時代の話思い出した。その頃（東京オリンピック前）ウラナミシジミは、房総半島先端の冬ソラマメ栽培地域で越冬することが分かった時代だった。その頃の虫雑誌「新昆虫」にフジマメを植えておくと必ずウラナミシジミが来るという記事があり、頭の片隅に残っていた。以前から花屋でフジマメの種を探していたが、見つからなかった。



画像-3 フジマメの花

しかし世の中進歩すると、こんなの探すのはわけもない。ネット通販で簡単に手に入った。関西ではこの若い莢をキヌサヤのように食べるらしい。場所によってはこの豆を「インゲンマメ」と呼ぶという。

8月上旬、蒔き時の最後の時期に蒔いた。すくすく伸びた蔓は絡み合って2m異常の支柱を折り返して伸びている。花穂が伸びて薄赤紫の花を上げる。この姿が藤に似て藤豆かと思ったら、鶺鴒（かささぎ）豆だという。カササギと一緒に朝鮮半島由来の豆か？9月上旬、いよいよウラナミシジミが登場。嬉しくなってカメラを抱えて一日張り付いていた。

4. 卵の確認と飼育

我が家に初めて登場したウラナミシジミは、かなり擦れた♀。もちろん交尾済みで産卵場所を求めて飛び回りフジマメを見つけたのだろう。フジマメの長い花穂で産卵し、しばらく葉上で休息、その後また卵を産む。数日すると母チョウは3頭となり、卵も数え切れない。最初に咲いた花が豆になる頃、花穂を取って来てインゲンマメと一緒に容器で飼育する。幼虫は豆の莢に穴を開け、中にもぐって糞だけを外に出す。頭隠して尻隠さずの幼虫もいる。この糞の水分がだんだん多くなりべちゃべちゃになると前蛹寸前。落ち葉を重ねておくとその中で蛹化する。この間、1～2回糞掃除をするだけで蛹になる。



画像-4 蕾の莢に産んだ卵

10月のこの時期には約1週間で蛹は真っ黒になる。黒くなった蛹をテーブルに置いていつでも撮れる準備をしていたが、テレビを見ながらでは羽化しない。日付が変わっても出てこないの、意地になって酒を飲みながら見ていたが、気がついたら朝になっていた。このチョウは音に敏感なのだろうか。

10月中旬、たくさんのウラナミが羽化し全て庭に放した。みんな元気に消えてしまったが、どこかで交尾したのであろう、新しく母チョウが来て卵を産んでいる。

このチョウは、マメの花でなくても卵を産むらしい。幼虫が餌にしているインゲンマメの切り口に産んだ写真を見たことがある。容器で飼育する場合、マメの花を準備するのは大変だが、インゲンマメならいつでも準備できる。11月を過ぎたらインゲンマメに産ませてみたいと思っている。



画像-5 蛹



画像-6 産卵

5. おわりに

蝶の飼育は、その生態を知る重要な方法でもあるが、綺麗な標本を得るための一つの手段でもある。その第一段階は卵や母蝶の採集から始める。これが種の絶滅に寄与しないか心配している。最近話題になっているが、産地が限られ、少なくなった蝶の保護活動が始まると、逆に網を持った採集者が集るといふ。何と云うことか。大震災でも略奪の起きなかつた日本なのに。保護のため採集禁止になっている東御市のオオルリシジミを採ったとか、長野でクモマツマキを採ったなど、もつてのほか。

ギフチョウやヒメギフチョウの紋様の地域差は、その遺伝子に違いがあるだろうと思われていたが、遺伝子の違いではないらしい。地域差に遺伝子の違いがないのならば、種の存続を優先すべきであろう。飼育すると飼育模様が出るとか云う人がいるが、そこで栄えていた蝶が復活するならば、飼育模様などの贅沢を言える事ではないと思う。簡単に出来ることではないが、その生育環境の整備が出来たら、近くの産地からの導入も許される時期に来ているのではないだろうか。

6. 参考文献

日本産蝶類標準図鑑 白水隆 学習研究社

新昆虫 Vol. 9 No. 3 房州におけるウラナミシジミ 鈴木晃 北隆館

チョウゲンボウとの出逢いと巣立ち後の観察記録

堀 修

1. はじめに

平成19年4月からS市の施設へ転勤になった。水を象った4階建て本館の1階は機械室、2階と3階は事務所、4階が試験室や臨時会議室、資料倉庫になっている。

転勤後は、仕事のために私が使う試験室に時々出入りすることになり、5月の黄金週間後も作業のために試験室に入り、気分転換のためベランダに出たところ、小型の鷹が目の前を威嚇しながら通り過ぎて行き、また折り返して私の頭上をかすめて通過した。びっくりしたが、近くで営巣していることを直感した。それにしても凄い剣幕で「近寄るな!」と言っているような親鳥の迫力に圧倒された。平成19年5月8日、これがチョウゲンボウ(長元坊)との初めての出会いであった。

2. 4羽のヒナ発見から巣立ちまでとその後

5月8日(火)、威嚇された親鳥が餌探しでいないことを確認して、昼休みにベランダを探した。

ベランダ片端のコンクリート柱の裏側に、50cm×80cmほどの奥まったテラスがあり、覗き込むと白い産毛で覆われた4羽の小さな雛がいた。

いきなり覗き込んだので、驚いた雛の1羽は大きな雛の後に頭を隠しお尻を丸出しにした格好が何とも可笑しかった。隠れたのは4番子、ジッと私を見据えているのは1番子であった(画像-1)。画像-2は、5月18日で、産毛が抜け10日間でもかなり成長している。



画像-1 平成19年5月8日



画像-2 平成19年5月18日



画像-3 平成19年5月22日



画像-4 平成19年5月23日

画像-3は、ヒナが4羽揃った最後の写真（5月22日）で、各々大きく成長している。
画像-4は、1番子が巣立った5月23日の朝。まだ動きがぎこちなかったが、夕方には
しっかり親からもらった餌を自分で引き裂いて食べるほど落ち着いた。



画像-5 平成19年5月24日



画像-6 平成19年5月25日



画像-7 平成19年5月27日

2番子は5月24日（画像-5）、3番子は5月25日（画像-6）、4番子は5月27日
（画像-7）に各々が朝8時前後に巣立った。

幸運なことに、4羽の幼鳥の巣立ちを全て見届けることができたが、4羽とも巣立った直
後に私のいる4階ベランダに戻ってきて、挨拶をしてくれたのは感動的であった。
そして、巣立った後も3番子と4番子は建物のある構内で一緒に行動していたが、巣に戻
ることはなかった。



画像-8 平成19年11月1日



画像-9 平成20年2月4日

平成19年11月1日の朝、3番子（幼鳥）が初めて巣に戻ってきた（画像-8）。平成20年2月4日朝、巣立った4階ベランダ雨水樋にいた3番子（画像-9）。



画像-10 平成20年4月2日



画像-11 平成20年4月14日

3. 巣立った3番子♀の繁殖行動

平成20年3月16日に抱卵を確認。その後、4月2日には5個の卵を確認した（画像-10）。しかし、人慣れしていない♂が餌運びや代理抱卵をだんだんとしなくなったため、♀はストレスと空腹で、最後は自分で卵を食べて巣を出ていった。2サイクル目、3サイクル目も抱卵を確認したが、いずれも孵化せずに繁殖は失敗に終わった。画像11は、屋上で餌を♀に渡した直後の♂。

平成21年も前年と同時期に3サイクルまでの産卵及び抱卵を確認したが、やはり孵化せずに繁殖は失敗に終わった。

繁殖に失敗した3番子♀は、それでも構内に時々飛来したが、巣に入ることはなかった。

平成22年は構内で時折り姿を見かけたが、巣立った場所や構内の別の場所で繁殖行動を確認することは出来なかった。

平成23年3月末で定年退職のためS施設から去ることになったので、その後の状況はわからないが、平成23年11月現在も時折施設内で見かけるとの情報を得ている。

ヒトの生活圏である施設内で平成19年5月に巣立ったチョウゲンボウだが、その幼鳥が平成20年と21年、繁殖を試みたものの失敗した原因が何に起因しているのかははっきりとは解明されていない。

しかし、3番子♀は雛の時から私がコミュニケーションを取り続けたことで、信頼関係が構築され、3番子♀が自分のお気に入り場所として、私が仕事で出入りする場所を選んだのは事実である。天敵のカラス等から身を守るための手段のみならず、私との会話を楽しみの一つとして選んだのだとすれば、大変嬉しいことである。



画像-8 平成20年3月9日

約80cmの近接撮影（180mmマクロレンズ使用）

4. 最後に

言葉の通じない野生の鳥とヒトが根気よくアイコンタクトと話しかけによるコミュニケーションを取り続けられれば、画像-12のような信頼関係が出来ることを伝えておきたい。

蝶雨 蝶合戦

古谷 隆一

1. はじめに 蝶と魂

私達の日本チョウ類保全協会機関誌「チョウの舞う自然」13号(2011-10-5発行)の裏表紙掲載写真を目にした読者から次のような指摘をいただいた。

「このチョウの群飛は古くは鎌倉時代、そして江戸や明治の人々が言っていた蝶雨だ」。青森のリンゴ畑の上を飛ぶ何千、何万のアカシジミ (*Japonica lutea lutea*) の群れ。写真は当協会会員で弘前大学大学院で野生生物の生態、保全の研究をする工藤誠也氏が撮ったものだ。

このようなチョウの群飛をはっきり撮った写真は極めてめずらしい。同じ場所で2年連続の現象と工藤氏はいう。我が国の史書にも群蝶乱舞の現象の記述が沢山見られる。

例えば鎌倉時代諸事の記述「吾妻鏡」、江戸の出来事を整理した「江戸編年事典」などにも、蝶の群飛群発を異常現象として捉え、「蝶雨降(蝶雨の如く降る)」の記述がある。なかには江戸深川(現在の東京墨田区)で起きた蝶雨を事件プロローグとする半七捕物帳の一篇「蝶合戦」もある。

しかも、これらの多くは蝶を人の魂と強く結びつけている。

一頭の蝶を亡くなった人の魂の化身と考えたり、蝶の群飛、即ち蝶雨を災害、戦争、凶悪事件の予兆、前兆と捉えている。

従って昔の人の蝶や蝶雨への見方は、昔の日本人の信仰の一つだと捉えなければならない。

蝶雨の史実の意味するモノを知るには、明治に活躍し虫と人の心の関係に強い関心をもっていた小泉八雲の言う「人の魂と蝶との関わり」から見ていく必要があるだろう。

2. 魂の化身

明治23年に来日し、日本に帰化した小泉八雲(ラフカディオ ハーン)は、蝶に関する日本人の奇怪な信仰のうち最も興味深いのは「生きてる人間の魂が蝶に姿をかえてさまよい歩くことがあるという考え方だ」と言う。(小泉八雲著 蝶の幻想)

例えば「蝶が客間に入って来て竹のすだれの裏の止まると、蝶が最愛の人の魂の化身となって会いに来てくれた」という考え方もこれにあたるという。

また非常に沢山の人の魂が蝶になって飛び交い(群飛し)人々の恐怖心を煽り立てることもある。

八雲が指摘するように、我が国の史書にもそのような出来事が沢山記述されている。

例えば、939年に平将門がひそかに京都で謀反を企てていた時、おびたしい数の蝶が京都の街中で舞い人々を驚かせた事があった。

人々はこれを見て凶事の前兆だと思い恐れおののいたという史実もある。

八雲はこれを『謀反の戦場で死ぬ運命にあった兵士達が戦いを前にして、死の予感におそれ心に動揺を覚え、まだ生きている兵士の魂が蝶となって群飛した』と説明した。

このような蝶の群飛を人々は蝶雨、あるいは蝶合戦と呼んだ。

蝶でも特にミドリシジミの仲間は、♂同士が飛翔空間のテリトリー争いを頻繁に行う。

この時の飛び方は卍巴飛翔（まんじともえひしょう）と呼ばれ、まるで多数の武士が入り乱れて戦う合戦のようだ。

これを知っている昔の人が蝶の群飛を合戦に例えたのであろう。このシリーズ1)冒頭に紹介したアカシジミの群舞、このチョウもミドリシジミの仲間（Theclini族）で卍巴飛びを行う。

そして我が国の伝統的信仰では、蝶は生きている人の魂であると同時に死んだ人の魂であるとも考えられている。人が亡くなり、最後に魂が人の肉体を離れる時、そのことを人々に知らせるために魂は蝶に姿を変え、親しかった人の所へ飛んでいくのだと考えられている。そのためどんな蝶でも家に入って来たものは大切にあつかわなければならないと、昔の日本人は子供に教えた。母がギリシャ人、アイルランド人を父に持つ八雲は「世界広しと言えども蝶を人間の魂の化身だと考えるのは日本人とギリシャ人だけだ」という。

動物生態学者の故日高敏隆博士は虫のエッセイ「昆虫におけるペルソナ」のなかで「ギリシャ人は蝶を魂も意味するプシケー（Ψυχή）と呼ぶ。すなわちギリシャ語プシケーは蝶と魂の二つの意味を持つのだ」と述べている。そして同じ語源の英語サイキ（psyche）は靈魂を神格化したもので、蝶の羽を持った美少女の姿をとるエロスの妻の事だ。

3. 夭逝した許嫁の魂が蝶になってお迎え

小泉八雲は晩年自宅近くの東京牛込（現在の東京新宿区）付近をよく散策しその途上、牛込弁天町の曹洞宗「宗参寺」にまつわる高浜老人物語を耳にはさみ、それを自作「虫の研究」、「蝶の幻想」に取り入れた。このお寺は江戸の儒学者山鹿素行の墓もある名刹だ。

この物語はその後昭和初期に活躍し若くして世を去った昆虫学者、横山桐郎（1896-1932）の虫のエッセイ集「優曇華（うどんげ）」でも取り上げられている。

チョウの専門書籍では信州須坂の「蝶民俗館」館長、今井章氏も著書「鎌倉蝶」で紹介している。

これは高浜老人の若い時の許嫁であった娘さんが若くして世を去り、50年後彼女の魂が老人の臨終時に蝶になってお迎えに来る話だ。

八雲はこれを最も日本らしい美しい物語だと評している。

若かった高浜さんは許嫁が結婚前に病死した事をひどく悲しんで日々を過ごした。そして一生独身を通す決心をし、彼女の墓のある宗参寺裏手に家を建て毎日欠かさず墓参りする生活を何十年と続けた。近所の人々も高浜さんがいい人なのにならいつまでも独身を通しているのを訝しんだ。高浜さんは結婚しない事を心に誓い許嫁の墓参りを毎日実行して

いたが、このことは誰にもいわなかったのであった。

50年以上の歳月がたち、高浜さんも高齢になって、不治の病で床につく事となった。そこで老人がかわいがっていた甥とその母親が世話するために老人家にきた。ある蒸し暑い日甥と母親が看病していると、一頭の白い蝶が老人の枕元をひらひらと行きつもどりつと飛び交った。青年が団扇で追っても追っても蝶は枕元を離れようとはしなかった。

しばらくたち尚も青年が追うと、蝶は嫌々をするように飛びながらやっと簾の陰から外へと飛び出した。庭は宗参寺の墓地へと続いている。青年は団扇を片手に白蝶を追い外に出た。蝶は追われるのが嫌なように墓地の方へとゆっくり飛んでいた。青年が蝶を目で追うとある墓石の上で白い飛体は突然消え失せた。

青年が急いでその墓石を見ると、聞いた事のない名字の下にアキ子の名と享年18歳の文字がかろうじて読み取れた。墓はきれいに掃除され、花も萎れていたが供えられていた。青年はあたりを見渡すも蝶は忽然と消えたままだどこにも見えない。彼はあきらめて病人の元に戻ると看病していた母親が「おじはたった今息を引き取った」という。老人は安らかな笑顔でまるで眠っているように見えた。青年は墓地で見て来た一部始終を母に告げると母親は言った。

「アキ子はおじさんの許嫁の名だ。蝶はアキ子さんだったのね。アキ子さんが迎えに来たのね。アキ子さんに会えておじさんもさぞうれしい事でしょう。おじさんの顔がそう言っている」。八雲の言う美しい物語はチョウが人の魂の化身であった話であった。

4. 魂が黄蝶となる「安芸之介の夢」

小泉八雲は明治30年代、東京帝国大学英文学科の講師を務めていた。そこでの講義「文学における超自然的要素の価値」のなかで「超自然の物語などは、すぐれた文学の中ではすでに時代遅れのものだと考えるのは、大きな誤りだと私は指摘したい」と述べている。

八雲は魂と蝶との関係も超自然現象と捉えていたのであろう。文学作品の中に積極的に取り入れている。一頭の黄色の蝶が、人の心、魂の化身であったという話も八雲は遺しているのだ。八雲の怪談に収録されている「安芸之介（あきのすけ）の夢」物語である。

黄蝶になった郷士（封建時代のサムライと農民を兼ねた特権階級）安芸之介の魂が、蟻の巣のなかで見たことと同じ事を、本人が昼のうたた寝の夢で見ると言う話だ。

昔、武蔵の国の十市に住んでいた郷士、宮田安芸之介は庭の杉古木の下で友人と酒を酌み交わしての談笑中に、眠気に襲われ一眠りして次のような夢を見た。安芸之介がりっぱな王国の王の一人娘の婿に迎えられて、その領土の島の国主に任じられた。国主としての生活は子供もたくさん生まれ、幸福そのものであったが24年目になってお妃が突然他界してしまった。

お妃の遺骸は盛んな葬儀をもって島の小高い丘の上に葬られ、りっぱな碑も建てられた。安芸之介は国王の命によって島の統治は長男に任せ、帰国のため船に乗ったところで、は

っと思って目が覚めた。みれば自分は屋敷の木の下で寝ているのであった。

周りを見渡せば二人の友はあいかわらず酒を酌み交わし談笑していた。彼は友二人に夢でみた話を聞かせた。友は不思議な夢だなど言いつつも、われわれも貴殿がうたた寝している間に不思議なことを見聞したと次のように語った。

黄色の蝶が一頭寝ている貴殿の顔の周りを何度も行きつ戻りつ飛び回った。そして見ていると蝶は突然御主のそばの地面に舞落ちた。すると大きな蟻が寄って来て、黄蝶を捕え側の蟻の穴に引きずり込んだ。

しばらくして貴殿が目覚めるちょっと前、蝶は再び穴から出て貴殿の顔の上へとひらひら飛び貴殿の口の中へと消えていった。

話を耳を傾けていた友人が「蟻は奇妙な奴だから化けるかもしれない」と付け加えた。これを聞いた好奇心の強い安芸之介は、鋏を持って来て蟻穴を掘った。おおきな造りの蟻の巣を地中に見つけた。巣の中の構造は安芸之介が統治した島の街並みと全く一緒であった。安芸之介たちの住んでいたお城そっくりの土の建物には、ひと際大きな女王蜂が横たわっている。

さらに観察を続けると、土の盛り上がったところに小さな石塔の形をした石があり、そこには一匹の女王蜂の屍骸もあった。安芸之介の魂が黄蝶となって蟻の巣の中で見て来た事を、その化身が魂にもどったとき、これを夢の中で人間の世界として再現したのであった。

5. 蝶雨を舞台に捕り物が展開

江戸万延時、江戸本所（現在の東京都墨田区両国）に何千、何万の蝶が舞う蝶雨、蝶合戦が起き、人々は悪い事が起きる予兆だと恐れおののいた。この蝶雨を舞台に、岡本綺堂の「半七捕り物帳」の「蝶合戦」物語が展開される。この蝶の群飛は史実で、稲垣史生（ふみお）編「江戸編年辞典」に収録されている、万延元年（1860年）本所堅川（たてかわ）通りに起きた蝶雨だ。

物語冒頭に岡っ引きの半七老人と客人の間の「.....今もお話した雀合戦、蝨合戦のほかには蝶合戦もよく起ります。いやその蝶合戦についての一つのお話があります。お話ししましょう」から物語は始まった。.....

この年六月の下旬から本所堅川通りを中心として、その付近に沢山の白い蝶が群がって飛んだ。初めは千匹か二千匹、それでもかなり諸人の注意を引いて近所の子供衆は竹竿、箒を持ち出して面白半分に追い回していた。

それが日増しに殖えて六月晦日には幾万の多きに達した。雪のように白い蝶の群れが乱れ飛ぶので奇観であった。「蝶々合戦だ」皆口々に叫んだ。群がる蝶は狂っているか戦っているのかよくわからなかった。ともかく入り乱れて追いつ追われつ、あるいは高く、あるいは低く、疲れたのか水の上にハラハラと舞い落ちるものもいる。

そこいらは時ならぬ花吹雪ともみられる景色であるので、屋敷の者も町家の者も総出になって、この不思議なさまを見物した。そのうち誰が言い出すともなく、こんな噂がささ

やかれた。

「やっぱり弁財天を自宅に祭ってお守りする尼僧の善昌さまの言うのは間違いない。これは弁財さまの言う通り災いの起きる前兆だ」。……

蝶の最も出盛ったのは朝の四つ時(午前10時)頃から昼の八つ時(午後2時)までで、これを過ぎると無数の蝶の群れは消えるように何処へか散り失せた。「弁財様のお告げに嘘はない。恐ろしい事が起こります」悪人善昌は再び信者たちに言い聞かせた。

江戸の人々は蝶雨が歴史の教える凶事の前兆だということを良く知っていた。蝶合戦にとどまらず、江戸時代の人々は何万の雀、螢、蛙が鳴く、飛ぶ、光る、蠢く現象を「○○合戦」と呼んで凶事、災害、戦争、流行病(はやりやまい)の前兆として恐れた。

善昌は犯罪を重ねる前に弁財天のお告げと称して信者にあらかじめ言い聞かせていた。「今年はおそろべき厄年であり、井伊大老の死ぐらいは愚かなことであり、五年前の大地震、四年前の大嵐、二年前の大コロリ(疫病コレラ)、それにも増したる大きい災いが江戸に襲いかかってくる。しかし、それには必ず何かの前兆があるので用心を怠ってはならぬ」。従って尼僧を悪人とは考えもしない人々は、そのお告げに恐れおののいたのである。事実この尼僧は、身代わり殺人など次々と悪事を働き、捕り物話は進んでいく。

尼僧も蝶雨に人々が恐れおののくを承知の上、これを絶好のチャンスとして悪事を次々と重ね、人々を恐怖のどん底に落とし、信者を増やし金儲けを企むのだった。

(岡本綺堂 「半七捕り物帳 蝶合戦 光文社文庫」より)

明治5年生まれの捕り物著者の綺堂は、この物語を連載で今から90年以上前の大正6年から発表した。この時期の読者は平将門時代、鎌倉、江戸 明治時代に起きた蝶雨が何れも凶事の予兆や後のできごとであった事を良く知っていた。従って著者も、蝶雨をプロローグとする事で当時の読者にも、恐怖の気持ちが伝わると考えたのであろう。

さらに半七捕り物帳には「正月のある晩、江戸の目白坂(現在の文京区関口2丁目)で一頭のモンシロチョウとおぼしき白蝶が舞う」で始まる「白蝶怪」という一編もある。正月に「なぜモンシロチョウが」と言う疑問を持つチョウ屋、虫屋も多いだろう。あとでこれにも応えよう。

6. 鎌倉幕府滅亡時の黒い揚羽蝶群舞 一方言「鎌倉蝶」の誕生

長野県須坂市で蝶民族館を主宰する今井彰氏はその著書「蝶の民俗学」[鎌倉蝶]のなかで黒いアゲハチョウを総称して「鎌倉蝶」と呼ぶ方言が生まれた経緯、更にこれと蝶雨との関連に関して鋭く分析されている。これらを十分参照したうえ、鎌倉蝶という方言誕生の背景を探ろう。

「鎌倉蝶」という呼び方、方言は今でも一部の地方では通用する。又これに関しては一部の地方の人は聞いた事があると言う。しかしその語源について何れも曖昧だ。曰く、

「以前からクロアゲハをそう呼んでいたが、その語源についてはわからない」

「大きな黒い蝶を不吉なモノと考える人達が使うらしい」

「万葉時代から鎌倉幕府滅亡までの戦乱時代の、死者の魂についての考えと仏教信仰が一緒になって黒い揚羽蝶を鎌倉蝶呼ぶのだ」。

これらの事も十分検証のうえ今井氏は、黒いアゲハチョウ（クロアゲハ、カラスアゲハ、モンキアゲハ.....）を総じて鎌倉蝶とよぶ方言の誕生には鎌倉幕府滅亡の時、この戦乱で亡くなった6000人の武士の魂が深く関わっているのではと言う以下の推論を展開している。（今井彰氏 上記著書）

言うまでもなく鎌倉時代とは建久3年（1192）源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、元弘3年（1333）北条高時の時に滅亡するまで約140年間の時代を指す。

この間、後で述べるように史書にも蝶雨と呼ばれた蝶の群飛活動があちこちで起ったことが記載されている。そして、幕府滅亡の戦乱直後に鎌倉、湘南、三浦半島に黒い大きな蝶の群飛乱舞が起きたと伝えられている。この戦乱で多くの鎌倉武士達は敵味方に分かれて戦いそして壮絶な死を遂げた。6000人という戦死者の数、これは当時として最大級の惨事であったのは言うまでもない。戦乱に参加した武士達が、多くの仲間の死を伝えるために故郷に帰る直前に、黒いアゲハチョウの群蝶乱舞が三浦半島一帯で起き、故郷に帰る武士達に大きな衝撃を与えた事は、想像に難くない。

武士達も皆群舞している大きな黒いチョウを戦死した仲間の魂の化身だと信じた。即ち、幕府滅亡で亡くなった6000という武士の魂の化身として無数の黒蝶が現れ、それが戦乱直後に見られた蝶雨になったと当時の人々は信じた。

小泉八雲の言うように当時の人々は、蝶を死んだ人の魂の化身と考えていたのだ。八雲には鎌倉幕府や鎌倉蝶に関する文は見当たらないが、八雲が幕府崩壊時の惨状やその直後の蝶雨の事実を知れば、間違いなく戦場に散った武士の魂と結び付けたであろう。

そして、今井氏の調査では、現在でも「鎌倉蝶」という方言が通用する地域があり、そこがこの戦乱参加の武士の出身地と、調査した地域ではほぼ重なる事を突き止めた。これは、仲間の死を伝えに故郷に帰った武士達が、帰る前に鎌倉、湘南地区で見た乱舞する数多くの黒蝶を、誰言うとなしに「鎌倉蝶」と呼んでいたとの証だろう。これでこの方言が武士達の故郷で流布したと考えられるのだ。

古い時代の史実、特に鎌倉幕府崩壊時の事情にも詳しい史書に、日本の古典文学書「太平記」がある。この史書によると、かれら鎌倉武士達の帰った郷里は武蔵、相模、上州上毛、下野（しもつけ）、上総（かずさ）、常陸（ひたち）を中心にして、西は伊豆、駿河（するが）、甲斐（かい）、そして信濃へと伸びている。

一方、今井氏の調査による方言「鎌倉蝶」が現在も残る地域は以下であった。群馬県（高崎、前橋付近および北部一帯）、埼玉県（所沢、本庄、飯能）、神奈川県（川崎、横浜、鎌倉、藤沢、平塚、小田原、三浦半島一帯）、山梨県（甲府南部、御殿場周辺）、静岡県（熱海、伊豆半島一帯、三島、富士）、東京都（西多摩地区）。尚、茨城、栃木、千葉は未調

査地であるが、今でも方言の鎌倉蝶に通じる地域のある可能性は高いだろう。

(参照文献：今井彰著 蝶の民俗学(築地書館 1978)、鎌倉蝶(築地書館 1983))

7. 歴史書に見る蝶雨

日本歴史学者元桐朋学園芸術短期大学学長和歌森民男氏は、史書には多くの「蝶雨」や「蝶雨降」という表現はあるものの、日本国語大辞典「諸橋大漢和辞典」には「蝶雨」「蝶合戦」という語は見当たらないと言う。

しかし、これまで何度も名の出た蝶民俗館主宰の今井彰著「蝶の民俗学」にもあるように、我が国の名の知れた歴史書でも、数多くの蝶雨、蝶合戦の表現にお目にかかる。そのいくつかを簡単に紹介してみよう。

まず稲垣史生編「江戸編年辞典」には、5. で紹介した半七捕物帳「蝶合戦」の舞台本所(東京墨田区両国)で起った蝶雨の記録が見られる。繰り返しになるが、さわりをおさらいすると、「.....毎晩白い蝶が群がり雪の降るように見え.....人々はこれを蝶合戦と叫んで.....お互いに不吉の兆しとして恐怖心煽り立て合った.....」とあるように、この捕物帳は史実を舞台にしている。

また、鎌倉時代の史実を記録した吾妻鏡でもつぎのような文が目に入る。「文治二年.....黄蝶飛行。殊遍満岳宮.....」「宝治元年.....庚午。黄蝶群飛。.....幅假令一許丈。列三段許凡充滿鎌倉中.....」現在のことばに置き換えてみよう。

「文治二年(1186)五月一日、黄蝶が鎌倉鶴岡神社に満ちた。また宝治元年三月十七日、黄蝶群が幅一丈(約3mm)、三列になって鎌倉中に満ちた。鎌倉の人々はこれを戦乱の前触れだと恐れおののいた」。

これより以前の現象として帝王遍年記に「治承二年(1178)八月、叡山坂本で粉蝶(白蝶)が雨の如く降ると同時に京都高雄山でも同じ現象が起き、『あたかも高雄山摩滅の時の如し』と京都人に騒がれた」とある。

さらに藤原定家著「名月記」には次のように書かれている。「或る人云う自四月二十八日至于五月三日、日吉社頭蝶雨降」とある。「嘉永元年(1235)六月十三日、叡山にまたまた蝶雨あり。これは戦乱の前兆と人々は恐れた。また天福元年(1233)四月二十八日から五月三日にかけて、日吉神社の社頭に蝶雨が降った。これは山上で争乱が発生し、滅亡する時であろうと人々は悲しんだ」。

さて、このように史書では蝶雨の記録は尽きないが、これらの現象に関して現代の昆虫学者の次のような博物学的コメントも目にする。「自然保護 2011 JUL/AUG No 5 2 2」大阪府立大 石井実教授：「1284年秋の鎌倉における『黄蝶』の集団移動の記録がある。この『黄蝶』は昭和初期前半に『顔にぶつかって目も口も開けられないほどの大群が東京、大阪の街中を通過する事もあったイチモンジセセリと考えられていますが、何のための移動なのかは完全に解明されていません」。

さて、蝶雨は勿論昔のことだけではなく、今でも起きている現象だ。さらにこれは、我が国固有の現象でもない。北米や中米で毎年起きる帝王を意味するモナーク (Monarc) と呼ばれるタテハチョウ科のオオカバマダラ (Danas plexippus) の群棲、群飛は誰でも知っている。そして昭和50年発行の日向博美著「チョウを求めてーアメリカ大陸縦断5万2千キロ 238日間の記録よりー」にも、日本人の経験した南米での蝶の群飛即ち、アンデス山中で遭遇した「チョウ吹雪」の記録がある。

「.....車を走らせている時、真っ白の蝶アンデススジグロシロチョウ (学名不詳) が、まるで雪が舞うように飛んでいる。『チョウ吹雪だよ!!これは』車のフロントガラスの破損防止用金網に無数のチョウがぶつかる。あるものは無惨に破壊され、あるものはパチという音と同時に翅をもぎとられ、道路に落ちる。.....チョウが現れ始めてから姿が見えなくなるまで、延々と続く50Km以上のチョウ群飛の中を車は走り続けた。.....」。さすがスケールの大きい蝶雨だ。

さて、上記吾妻鏡に見られる黄色の蝶の鎌倉地方における群舞は、その時代背景からして納得しやすいと次ぎように言う昆虫学者は多い。「記録のある文治2年は鎌倉に幕府がおかれる直前であり、この地域の武士たちは今後の軍馬需要の増大を見越して、三浦半島一帯に多くの牧場を作った。そこには、馬の飼料となるシロツメグサなどマメ科植物をまき、これが食草となってキタキチョウ、モンキチョウなどが群発したと考えられる」。

8. 群舞、乱舞はすべて白蝶

日本に西洋の博物学が入ってくる前の生き物に関する学問は本草学と呼ばれた。この学問は薬草研究にその端を発し、江戸時代後半盛んになって、植物一般、動物そして鉱物までへと対象を広げていった。

我が国の本草学ではご存知の通り、動物の獣、鳥、魚以外の小さな生き物は、ひっくるめて皆「むし」のたぐいだった。それぞれの漢字表示には「むし (虫、蟲)」が使われている事からもわかる。蜘蛛 (くも)、蠍 (さそり)、蜥蜴 (とかげ)、へび (蛇)、かに (蟹)、かえる (蛙)、.....、どれもこれも「むし」だらけだ。

このため、西洋の博物学が本草学に取って代わり、国内にひろまった明治、大正時代に活躍した初期の昆虫学者の中には、自分が新進の西洋流昆虫学者である事を誇示するためか、6本足、4枚翅の「博物学的むしの昆虫」を他の虫一般と区分するためわざわざ難しい字「蟲」を使ったと言う人もいた。

江戸やそれより前には当然ながら『蝶』と「蛾」などは区別されない。それどころか当時人々はむしろ、「蝶」の文字からは蛾「おかいこ」を想定したようだ。また、分類学の視点の弱い本草学では、蝶、蛾を含めた鱗翅目 (チョウ目) と他の虫との分けも貧弱だ。従って、翅があって飛び白く見えるモノはひっくるめて「粉蝶 (白蝶)」とよばれた。

あれこれ考えると、日本の史記にある「蝶雨」「蝶合戦」の主役をすべて蝶と考えてはいけない。勿論、当シリーズの最初に紹介した日本チョウ類保全協会の会報裏表紙のアカ

シジミの乱舞のように、専門家が種を同定し証拠写真もある場合を除くと、史書の蝶雨でも群舞した虫は蛾、蜻蛉（かげろう）やユスリカなどもあったことも考えられる。

明治以降では、この現象が新聞種になることも屢だ。近くは平成23年（2011）8月中旬、北海道十勝の帯広、広尾、大樹町一帯に白くて大きい蛾「カシワマイマイ（*Lymantria mathura aurora* Butler）」が大発生し、街灯、家々の窓辺で白い虫の乱舞が起き地方紙でも大きく取り上げた。

平成23年8月18日 十勝毎日新聞「.....広尾、大樹町など南十勝ではカシワマイマイが大発生。街中まで大群が押し寄せ、盆踊り大会でも、空一面ヒラヒラ舞って鍋ぶたも開けられなくなり、屋台も次々退散。建物の外壁一面に卵がびっしり産みつけられてこの除去、清掃も大変だ。住民の生活にも大きな影響を与えている.....」。役場では来年の発生数を少しでも減らすため卵除去に町予算を使い始めた。

今の時代さすがに新聞が虫の同定を誤る事はなかったが、地元のお年寄りたちは相変わらず「昨晚は白い蝶がまた沢山飛んで来て困った」と話しチョウ、ガを区別していない。武蔵野昆虫記（農学博士石井悌著 昭和15-9発行）には、いずれも後で主役舞姫は蝶ではなく、カゲロウの類いである事が判明した虫の乱舞を「白蝶舞う」との見出しで報じた新聞をいくつか紹介している。

明治38年9月 萬朝報「16日朝5時頃浅草雷門付近、未だ消えやらぬ電灯の影白くかがやき村雨しきり、人足まだ繁しからぬ頃無数の白蝶がいずれより飛び来り合して、一つの群が消えると次の群飛来と言う具合で、白雪卍巴と飛び狂った。地上に落ちたものは幾十萬匹と、同町一帯は地上が全く白で埋め尽くされた.....」

明治42年9月、埼玉新報「13日午後8時頃、幾十萬とも知れぬ白蝶の一団が熊谷村岡間（埼玉熊谷市）の荒川大橋で群飛した。橋中央を境として群れは南北に分かれ、両蝶群はすぎましき勢いをもって入り乱れ、たちまち奮戦激闘の様相を呈し、荒川橋上は白色もうもうとして恰も濃霧の湧いた如くであった。このため橋上の往来も中断され、通行人は橋の両端で唯茫然と白蝶戦を觀望した.....」この時の虫は後になって、石井博士によってスカシバカゲロウ（当時の学名；*Hagenomia micans* MacLachlan）であろうと推定された。

このように明治以前の蝶雨、蝶合戦の主役すべてを蝶とは断定できない。しかし、これ以上詮索するのは止めておきたい。昔の話は当時の人々の解釈に任せ、いまさら近代の昆虫分類を介入させる必要もあるまいと思えるのだ。

雑感と編集後記

館長代理 野原未知

何年昆虫資料館で何年ご案内をやっている、また防腐剤入れ替えなどでどれほど標本箱を開けて作業している、なかなか覚えられない虫の名前。多少見覚えのあるものは増えてきて、これはね・・などと口にする、それまで知らなかった来館者がびっくりしながら感心される。何より野に出て実際に歩きながら見つけて覚えた草花や虫というのが一番楽しいものなので、是非野歩き山歩きをしていってください。とお薦めする。

野山に生きる虫たちは、標本のように生前と並んでいるわけではない。日が射したり翳ったり、風が吹いたり鳥や飛んだり、キツネが走ったり鹿が糞をしたりの草原や森の中の葉裏で、けっこう賑やかに営みを継続している訳だが、突っ立っていても見えては来ない。

草木を分け入り、地に這い、共に飛んだり跳ねたり舞ったりしないと出逢えない。目安は食草や吸蜜の花や樹。夜にしか会えない蛾には、さらに遭遇できない。そこで、白い布を張ってライトを照らして誘き寄せる。迷惑千万なれど、勝手に身体は光に寄せられ、白いキャンバスに描かれた昆虫画のような格好を晒す。しかも生きていて動く。見たこともない模様を背負った蛾の驚異。現代美術に匹敵する世界が繰り広げられる様に誰もが虜になる。こうして少しずつ蛾類を知っていく。草木に至っては、何をしても動いてきてはくれないので、こちらが動くしか手はない。季節の唄を歌い上げる小さき花々に会うには、それなりの時間と労力が必要。館をほおって山に遊ぶことはなかなか出来ぬのと、元来名前を覚えることにそう興味がなかったことも手伝って、あまり無理を自分に強くないようにしている。ありがたいことに、その分野を埋めてくださる方々がいた。上田自然に親しむ会（代表・矢島千代子さん）の皆さんが、2006～2008年にかけて館裏山周辺を調査して下さった。65種の木々、10種のシダ、175種の草々。写真に納められている中から40枚ほど額装してもらい、その一部を常設展示している。標高1000m 地帯ゆえの植物相に伴って、蛾類も生息している。その調査にあたられたのは、田下昌志・福本匡志・丸山潔氏らである。伝統ある昆虫雑誌「まつむし」100号（2011. 3）に掲載された。2009～2010年に確認されたのは236種。さらに本年に至っての発見もあり、その都度びっくりしている次第。昼に夜にいつのまにか調査して下さっている。この貴重な時間と熱意が信州昆虫資料館の血肉になっていることは間違いない。小さな隣人たちの姿を確認しながら自然を護る立場に居る方々は確かに居て、新種発見の少年や、虫家さんの話題も新鮮だ。保護を兼ねてチョウの撮影をされている方々も多い。その常設展示もしている。同時に外来種のこと、絶滅寸前の種のこと必死に護っている人もいる。虫を凝視できる人の感性と、アーティストの感性に似たものを実は感じている昨今、そういった人々や情報が行き交う昆虫資料館であり続けたい。館報No.8には、そんな仲間の寄稿文を掲載させていただいた。有形無形に支えてくださっている皆様に心より感謝申

しあげます。なお、館友の若いご夫婦の娘さん（2歳）が早くも召されてしまった。心よりご冥福をお祈り申しあげます。

〒386-1601 長野県小県郡青木村田沢 1876-6 信州昆虫資料館
TEL 0268-37-3988 FAX 0268-37-3964 冬期 TEL 080-1182-4576